

研究テーマ：「意図的・組織的・就学前教育（保育）」に関する研究 ～心身を鍛え、主体的に学ぶ意欲をもった子どもを育てるために～	
研究代表者（職氏名）：教授 中瀬古 哲	連絡先 広島キャンパス・人間文化学部・健康科学科 (E-mail 等)：nakaseko@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者（職氏名）：光本弥生（鈴峯女子短期大学・准教授）、黒川哲也（鈴峯女子短期大学・准教授） 岡田真美、坂本美帆、空谷友貴、中村友香、森田貴子、山田安由美(元中瀬古研究室4年生)	

研究の目的

身体運動文化のもつ総合的な教育機能のうちでも、人格形成機能に密接に関係あると思われる「社会的発達機能」を中核にすえ、心身を鍛え、主体的に学ぶ意欲をもった子どもを育てる保育カリキュラムの開発を実践的に行なうこと。

研究の方法

- ◆1年を単位とした、実践（課業）づくりへの参画とデータ収集
保育園に出かけ、課業（教授—学習活動）の作成・実施・修正場面に参画。
- ◆「文化・教材（あそび）」の活動分析による内容構造の検討
「文化・教材（あそび）」の担っている、心身形成と社会的発達の関わる機能・構造・意味の検討。
- ◆保育カリキュラムの論理的構造の分析（平成20年）
カリキュラムの目標—内容—方法の構造と時系列的な変化の特徴を捉え固有の条件や意味の読取。
- ◆就学前幼児の発達と身体運動文化の教育的機能
発達課題や生活課題を踏まえ、活動システムの視点から、「身体運動文化」の教育的機能を描く。
- ◆保育士の成長と体育カリキュラムの開発（平成21年）
担当保育者の体育カリキュラム、身体形成、社会的発達、実践づくり、子ども観、保育観に対する意識の変容描写。

研究の結果（経過報告）

- ◆実践（課業）づくりへの参画
公立保育園（2）、私立保育園（2）、公設民営保育所（2）の設置形態の違う保育施設6箇所を対象に、述べ56回の研修等も含むフィールドワークを実施した。延べ、160名の就学前児童（5歳児）のボールゲームの教授—学習活動を、約1年間に渡って継続的に観察した（実施期間：07年4月18日～08年3月25日。表—1参照）。

表—1 平成19年度フィールドワークの実施状況

保育園	設置形態	所在地	訪問回数 (回)	観察対象 児童数(人)	備考
N保育園	私立	広島市	11	20	
K保育園	私立	広島市	12	32	
IE保育園	公立	広島市	9	51	2クラス
YH保育園	公立	広島市	8	34	
M保育所	公設民営	庄原市	11	23	
SK保育所	公設民営	庄原市	5	※13	※4歳児 11月よりスタート

◆明らかにになった知見（「文化・教材（あそび）」の活動分析による内容構造の検討）

延べ、160名の就学前児童（5歳児）のボールゲームの教授—学習活動を、約1年間に渡って継続的に観察した結果、以下のような知見が得られた。

- ① “的あてゲーム”は、全ての子どもの参加を可能にする運動遊び（教材）である。
- ② ボールゲーム活動においては、集団思考場面が重要であり、学習／指導が可能である。
- ③ ボールゲーム活動においては、班での話し合いが重要であり、学習／指導が可能である。
- ④ ボールゲーム活動においては、リーダーの存在が重要であり、学習／指導が可能である。

また、集団の参加に特別な課題を有する子ども（発達障害児・境界領域児を含む）の、継続的に行動を観察・追跡した結果、以下のような知見が得られた。

- ① 発達障害児にとっても、“的あてゲーム”は意欲的に参加できる運動遊び（教材）である。
- ② 発達障害児の学習要求を育み、居場所を保障するためには小集団（チーム）が必要である。
- ③ 発達障害児にとっては、集団思考場面や班での話し合い（相互批判）が困難な場合が多く、仲間、リーダー、保育士の援助や配慮が必要不可欠である。
- ④ 発達障害児の存在が、仲間やリーダーとの関係等、関係性の変容を必然化させる。
- ⑤ リーダー指導においては、リーダー自身に負担がかかることが多く、指導においては特別な配慮が必要である。その際、リーダー自身の学習要求・発達課題に配慮することが重要である。

研究成果の交流・公表・活用

◆学会発表：

体育科教育における「社会的発達」の位置づけに関する基礎的考察，日本体育学会第58回大会，神戸，2007年9月

◆実践報告：

課題提案者の経営する保育所及び連携先の公立保育園の中間総括を、第9回広島県保育団体合同研究集会・5歳児保育分科会にて、実践報告という形で一般公開した（テーマ「友だち相互におけるコミュニケーションの広がりを目ざした環境づくり ～『的あて』を通して～」及び「“的あて”と出会った子どもたち」）。

◆中間総括：

フィールドワークの成果を還元・交流するため、11月17日（土）18日（日）本学において、6園すべての関係者が参加し、中間総括研究会を実施した。

◆研究発表：

2007年12月までのデータの一部ではあるが、「就学前教育（保育）における『学習集団づくり』について ～ボールゲーム活動を通しての子どもとの関係性の変容に焦点をあてて～」というテーマで総括した（2007年度卒業研究）。

◆成果活用：

19年度検討対象となったボールゲーム（的あて）という教材については、平成19年度県立広島大学親子体験企画・子どもと楽しむ4つの世界にて「しなやかな心とからだを育む身体運動文化」の一つとして紹介し、実践研究の成果を広く地域に還元するとともに、その機能を再確認した。